

1. 基本構想策定の目的

伊豆の国市長岡斎場は昭和 58 年竣工で、竣工後 30 年が経過し施設の老朽化や狭隘がみられるとともに、火葬炉設備の老朽化への対応など、長期的な展望に基づいた対策が求められている。そこで、本構想は、伊豆の国市長岡斎場の今後のあり方を踏まえ、長期計画の策定とともに今後の施設整備の方向性を導き出すことを目的とする。

2. 基本構想の概要

- 伊豆の国市における将来人口及び死亡者数の予測等将来フレームの整理
 - 将来人口及び死亡者数の予測を行い、将来フレームの整理を行う。
- 火葬場の機能と規模に関する調査・研究に基づき必要な規模等の算定
 - 長岡斎場の使い方等の調査及び、将来の火葬需要や地域の葬送習慣を把握し、今後の斎場（火葬場）整備に係わる必要機能及び火葬炉数などの規模や概算整備費用について整理を行う。
- 施設計画の方向性の検討
 - 求められた必要規模などの基本条件をもとに施設計画の方向性の検討を行い、構想案を策定し、ふさわしい場所など施設整備の方向性を提示する。
- 整備の目標年度に基づき、整備事業に関する長期計画の策定
 - 整備の目標年度と必要な作業スケジュールを定め長期計画の策定を行う。
- 斎場（火葬場）整備に関する市民向けの講演会の開催
 - 市関係者及び市民に対して火葬の意味や火葬場のあり方についての講演会を開催し、斎場（火葬場）建設について市民の認識を高めるとともに、伊豆の国市における斎場（火葬場）のあり方について参加者らとの意見交換を行い、今後の斎場（火葬場）整備の参考となる資料を得るものとする。
- 伊豆市火葬場の共同利用の可能性を検討
 - 伊豆市火葬場の共同利用にあたっての課題等を整理した上で、共同利用の可能性を検討する。

3. 長岡斎場の概要

「伊豆の国市長岡斎場」は昭和 58 年 3 月竣工で、同敷地内で建替えを行い、火葬炉 2 基、汚物炉 1 基で供用を開始した。竣工時は、待合ホールに和室が 2 室となっていたが、待合室が狭いため平成 2 年に待合棟及び収骨室へ向かう通路の屋根を増築している。竣工時は、旧伊豆長岡町、旧菰山町、旧大仁町で構成する伊豆長岡斎場施設組合による運営であったが、平成 17 年 4 月 1 日の 3 町合併により事務組合は解散し、伊豆の国市による単独施設として名称を「伊豆の国市長岡斎場」として運営を開始している。住所は長岡 1407-4 で、伊豆中央道長岡北 1 C 出口近くにあり、伊豆箱根鉄道伊豆長岡駅から 3 km、車で 10 分となっている。旧伊豆長岡町にあり、伊豆の国市全体では人口が集中している平地の部分のほぼ中央に位置し、三方を山に囲まれた谷内に立地しており、隣接して長岡中学校がある。

施設概要（現状）

- 敷地面積 2,130 m²
- 建築構造 鉄筋コンクリート造
- 火葬炉 台車式円型炉（前入れ後ろ出し方式） 2 基
- 汚物炉 45kg/回炉 1 基
- 施設内容 告別ホール、収骨室、待合室 1、待合室 2、事務室、トイレ（男・女・多目的）、駐車場（32 台収容）

4. 火葬数の推移

市内の件数をみると、平成 17 年度が 408 件で平成 25 年度が 498 件となっている。年度により多少の増減はあるが年々増加の傾向にある。市外の件数をみると、平成 17 年度が 69 件、平成 25 年度が 55 件となっており、平成 18 年度と平成 19 年度が 100 件前後みられたがそれ以外の年度は 50 件前後となっている。合計の件数をみると、平成 17 年度が 477 件、平成 25 年度が 558 件となっており、年度により多少の増減はあるが年々増加の傾向にある。



図 1 長岡斎場の火葬数の推移

5. 長岡斎場での葬送行為の状況

対象地域の葬送行為の特性を把握するとともに、既存施設の課題等を明らかにし、基本計画に必要な基礎資料を得ることを目的とし、「長岡斎場」の使い方について現地調査した。調査内容は次の通りである。

- 会葬者集団の人数と構成、
 - 葬送行為の状況、
 - 火葬の状況、
 - 葬送行為の経過時間、
 - 駐車場の状況
- 調査は 6 月 20 日（金）に実施した。今回の使い方からみた長岡斎場の問題点や課題を次に示した。
- コンパクトな設計の割には、一筆書きの動線となっているとともに、増築箇所があったりするなど、動線が分かりにくく職員が葬儀業者の案内誘導が必要になっている。
 - 待合室は増築したこともあり面積的には問題ないが、会葬者が多い割には告別ホールや収骨室など建物全体が狭く、部屋に入りきれない会葬者が建物の外に人があふれている。雨天時は会葬者が濡れる可能性がある。
 - 敷地が狭い上に駐車スペースが不足している。各自がそれぞれ乗用車で訪れる会葬者も多いため、火葬が重なった場合など駐車場所を探す車で二進も三進もいなくなり、会葬者の集合が遅くなるなど、見送りや焼香などの葬送行為の進行に影響を及ぼしている。
 - トイレは外から入るようになっており、また、待合室から溢れた会葬者は建物の外で待つことになるため、冬場は寒かったり、風雨が強い時はトイレ内が濡れる心配がある。

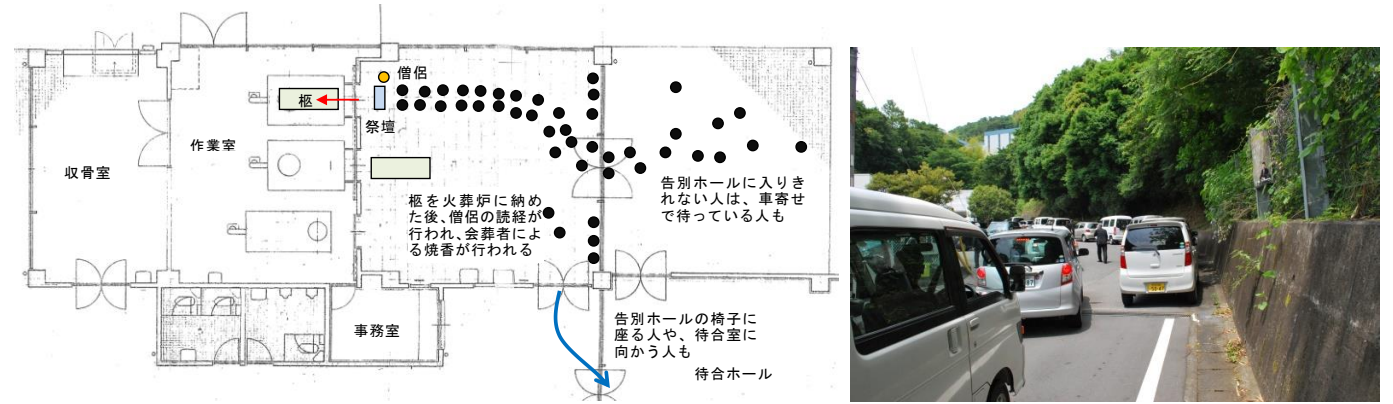


図 2 告別時の状況



写真 1 駐車場に止められずあふれた乗用車が進入路入口まで連なる

6. 現施設の延命化について

長岡斎場は建設後 30 年が経過し、機能面と構造面から主に次の問題点を抱えている。

①構造面

- 建物のねじれが生じやすい平面構成で、1 本の柱に応力が集中しやすいこともあり、耐震上問題がある。建物自体に多くのひび割れが見られる。
- 火葬炉設備は集塵装置の設置が無いことをはじめとし、現在の基準を満たしておらず、火葬時間も長い。

②機能面

- 会葬者が多い割には各部屋の規模が小さく、人が溜まるようなホールも無いため告別ホールや収骨室に納まりきれず、建物外に会葬者が溢れてしまう。
- 増築された待合室の場所が分かりにくく、更に会葬者の動線が一筆書きであるため、案内誘導がないと分かりにくい。また、会葬者の通路は外部空間となっており風雨の影響を受ける。
- 車寄せが狭いため霊柩車やマイクロバスの回転スペースが無く、会葬者の駐車スペースも不足している。

現施設の延命化のためには、構造面と機能面の両方の課題を解決する必要がある。機能面の課題の解決に対しては、受入れ時間を見直したり、会葬者数の制限や乗用車の台数制限など運営方法を見直す方法もあるが、制限を設けることに対する市民からの不満は高くなることが予想される。火葬炉設備も大規模改修が必要となるが、建物内には火葬炉本体を入替え、バグフィルターなど集塵装置の設置スペースは無い。収骨室を解体しそこに集塵装置を設置するとすると、炉前ホールで拾骨を行わなければならない、火葬スケジュールに影響を及ぼすことになる。機能面の課題を解決のためには、建物の増築が必要である。現状でも車寄せや駐車スペースが不足しているような状態であり、建物の増築部分と駐車場スペースが必要となるため、かなりの敷地の拡張が必要であるが、谷地にある現在の敷地の拡張は難しい。

建物自体を持たせるためにも耐震補強、屋上の防水工事や外壁の補修、建築の機械設備等の更新を行う必要がある

が、修繕を行っても機能面の課題は満たされることなく、結果費用をかけても会葬者の不満は解消されることはない。

7. 死亡者数の推計

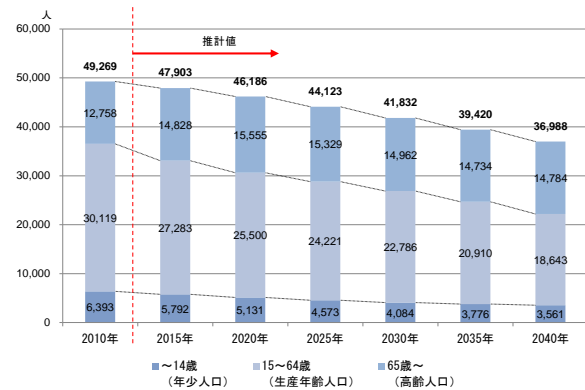


図3 伊豆の国市における将来推計人口

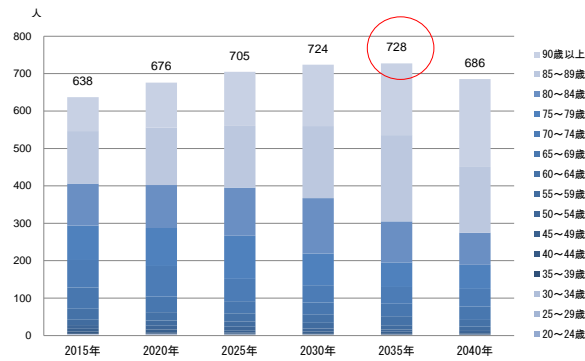


図4 伊豆の国市における死亡者数の推計値 (5年間の平均値)

国勢調査によると、伊豆の国市の平成22年(2010年)における総人口は49,269人である。国立社会保障・人口問題研究所(以下:人口問題研究所)の伊豆の国市の人口推計の結果を図3に示した。伊豆の国市の平成22年(2010年)における総人口は49,269人である。推計値をみると、平成27年(2015年)が47,903人、平成32年(2020年)が46,186人、平成37年(2025年)が44,123人、平成42年(2030年)が41,832人、平成47年(2035年)が39,420人、平成52年(2040年)が36,988人と年々減少している。それに伴い14歳以下の年少人口及び15～64歳の生産年齢人口も減少していく。65歳以上の高齢人口は増加するが、平成32年(2020年)以降は減少となる。しかし、高齢化率は年々増加することになる。

人口問題研究所の推計データを及び5年間の生存率をもとにしてとめた死亡者数の推計を図4に示した。2013年度(平成25年度)の伊豆の国市市内の火葬数は503人であった。人口問題研究所の推計によると、2020年(平成32年)には676人、2025年(平成37年)には705人、2030年(平成42年)には724人、2035年(平成47年)には728人とピークになり、現在の火葬数の1.5倍近くになることが推計される。

8. 必要基数と機能について

現在の火葬炉2基で告别ホール(炉前ホール)が1室で、各時間帯1件の計5件の受入れでは、冬場の火葬件数が多い時期は対応が出来なくなることが予測される。火葬予約は12:00前後を希望するが最も多い。12:00を中心にその前後に分散することになるが、今後は火葬件数が増えることもあり、12:00前後の受入数を増やす必要がある。現在は、各受付時間当たり1件の受入である。会葬者が多いため告别時間や拾骨時間は比較的長くなる傾向がある。火葬炉3基とし、炉前ホールを2基と1基で分割し、現在も収骨室があるため、2基の炉前ホールに収骨室を設けた場合のタイムスケジュール案を図18に示した。火葬の受入れ間隔はゆとりをもたせ2時間半とした。告別の形式は火葬炉に柩を納めた後に読経・焼香を行う現在の方式を想定している。最初の受付を9:30からとした。9:30、10:30、11:30、12:00、13:00、14:00、14:30の7件の受付とし、12:00前後は、11:30、12:00、13:00の3件の受付が可能となる。このようなタイムスケジュールとすることで、火葬件数がピークとなる時期でも希望が多い時間帯での火葬がほぼ可能となるものと思われる。新たな火葬場は、火葬炉3基で炉前ホールを2分割し、火葬炉2基の炉前ホールには収骨室を設けた計画を行うものとする。

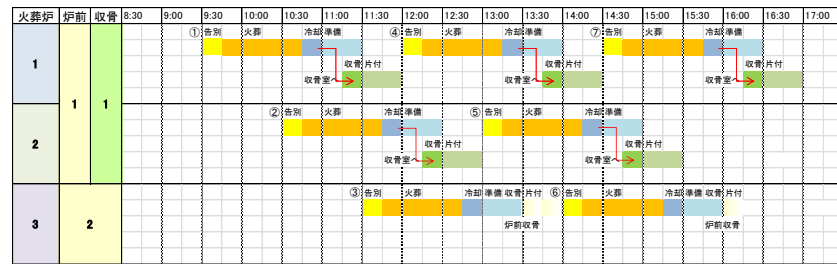


図5 火葬炉3基、炉前分割、収骨室1室の場合でのタイムスケジュール

9. 現地建替えの可否について

「長岡斎場」は、伊豆中央道長岡北1C出口近くにあり、国道414号線から工業団地に入る道路に取付道路が設けられている。三方を山に囲まれた谷内に立地しており、隣接して長岡中学校がある。敷地周辺は開発が進み、中学校の

他、大規模な工場が敷地を取り囲むように立地している。進入路沿いにも自動車整備工場や鉄骨工場があり、行き止まりの一番奥が敷地となっている。現状でも駐車場の不足しており、狭隘な敷地となっている。周辺は開発が進んでおり、進入路の工場が移転しなければ敷地拡張は難しい状態である。必要とされる3基の施設を計画すると、建物面積は1,800㎡程度となるが、駐車場や環境緑地を含めて、敷地面積が18,000㎡～20,000㎡程度は必要となり、敷地面積は2,130㎡しかなく拡張も難しいため、現地で建替えを行うのは非常に困難な状態である。また、現地建替えの場合には、現斎場を稼働しながらの建替えが要求されるため、仮設の建物を設置スペースもなく、駐車場の確保もできなくなり、火葬にも支障をきたすことになる。そのため、現地建替えよりも、他の候補地での建替えが望ましい。



図6 伊豆長岡斎場周辺

10. 伊豆市火葬場との共同利用の検討

「伊豆聖苑」には火葬炉1基の増設スペースがある。共同利用を行った場合、火葬炉を増設するだけでなく、建物の大規模改修を行うか、会葬者の人数制限や葬送行為の簡素化を図らなければ火葬の受入数を増やすことはできない。仮に火葬炉の増設を行い、建物の改修を行わない状態で伊豆の国市民が全て「伊豆聖苑」を利用するということになる。一部の時間帯に火葬が集中することにより、希望する時間帯に予約が取れず、火葬待ちが何日か生じることも考えられる。希望の時間に予約が取りにくくなることや、葬送行為に制限を受けることになると、利用する市民の不満は高くなることが予想される。

「伊豆聖苑」の共同利用を計画する場合には、火葬炉の増設以外に、告别室・収骨室・待合室の増・改築、駐車場の拡張も必要であり、また、作業性や利用者の動線を考慮した平面構成の見直しなども必要となる。伊豆市及び伊豆の国市の両市においては、将来、死亡者数が増加することも予想されており、今後、更なる火葬能力の向上が必要になることも考えると、共同利用には費用負担だけでなく、利用者である両市民の意見や要望を踏まえた上での検討も必要であり、市単独の整備と比べると課題が多い。

11. 用地選定の考え方

火葬場の用地をどうするかは、一番重要な問題である。立地は火葬場の雰囲気や大きな影響を及ぼす。ふるさとの景色の中での別れといったイメージも重要となる。現在の火葬場は、火葬炉の技術的な改良を踏まえて、立地場所の制限が少なくなってきた。火葬場には故人との最後のお別れのため、多くの会葬者が訪れる。そのため、居住地から離れた場所ではなく、市街地近くの人が集まりやすい場所での設置も増えている。周辺環境として、本来の火葬場がもつべき別れの場、葬送の場となるように配慮し、使用者や周辺住民に満足感を与える雰囲気づくりが望まれていることもあり、環境緑地も十分とれる、ゆったりとした敷地が確保できることが必要となる。

必要な敷地面積は18,000㎡となった。同規模の伊豆聖苑の敷地面積は約19,000㎡であることから18,000㎡～20,000㎡の敷地が確保できる場所を選定する必要がある。伊豆の国市は伊豆半島の北部、田方平野のほぼ中央に位置している。東は箱根山系の連山に、西は城山、葛城山などの山々に囲まれ豊かな自然環境を保っている。平野部は南北に狩野川が流れ、豊かな田園地帯が広がっている。多くの場所から富士山が望める地形である。火葬は遺族や故人とのゆかりがあった人との別れである。居住地から離れた山間での隠れた場所での建設でなく、会葬者が集まりやすいよう、幹線道路からのアクセスに優れ、ふるさとの風景として豊かな田園地帯や富士山が望める場所などが考えられる。

12. おわりに

「長岡斎場」の延命化のためには、構造面と機能面の両方の問題点を解決する必要があるが、敷地が狭いため、大規模な改修は難しく、延命化は困難である。また、将来の死亡者数も今後増加し、ピーク時には火葬数も現在の1.5倍になることが推計される。必要基数は現在の2基から3基となり、現在の他の火葬場のような施設内容とすると建物規模もかなり大きくなる。現在の敷地は拡張が難しく、稼働しながらの建替えは難しい。最後のお別れの場としての環境を考えると、新たな場所での建替えが望ましいと思われる。新たな敷地での建替えには長い期間を要する。

現在の「長岡斎場」は、会葬者の利用に当たって不便な面が多く、建物も寿命が近づいてきている。早急な対応が求められる。行政と市民が一体となり、新たな火葬場のあり方について検討を進めていく必要がある。